

「夢じゃなくても」

蟹球
リク

【あらすじ】

予知夢を見ることができる松下真尋（27）。真尋は中学時代から予知夢を見ることができたのだが、大した夢を見ることができず、クラスメイトからは役立たずだと馬鹿にされて、スクールカーストの下位に属していた。真尋は、馬鹿にしてくるクラスメイトたちをいつか見返してやることを目標に、勉強に励み、辛い中学校生活を乗り越えた。

努力の甲斐あって、真尋は高校で進学校に入学し、大学も偏差値の高い学校に入学し、結果的に有名企業に就職する。

ある日、真尋は中学時代の同級生である佐々木璃子（27）がスーパー銭湯に行くことを予知夢で見る。見返してやるチャンスだと考えた真尋は、偶然を装って璃子に近づき、璃子の彼氏と、スーパー銭湯で偶然出会った河合良太（27）を含めた四人で食事をする。璃子は大学に行っておらず、また璃子の彼氏は大変つまらない人間で、見返すことに成

功していたものの、中学時代に予知夢について馬鹿にされたことを思い出したことで、璃子が社長になっていることを知って、真尋は落ち込む。これまでがんばってきた自分の人生はなんだったのかと思ひ悩む真尋。すると、河合が熱く真尋に語りかける。

実は、河合は真尋の予知夢に助けられて就活を突破していたのだ。そんな人生の恩人である真尋に対して、予知夢は役に立っている、身近な人を救っている、励ます河合。河合の励ましによって真尋の心が少しずつ動き出す。

帰り際、予知夢で未来の河合の行動を見た真尋は、河合が目的地にしていた臨時休業中のカフェへ行くことを未然に防ぐ。真尋は、予知夢が役に立ったことを確信し、また真尋と河合の距離がぐっと縮まったのであった。

【人物関係表】

松下真尋（21）（27） ……会社員

河合良太（21）（27） ……会社員

佐々木璃子（27） ……真尋の旧友

東海林章大（27） ……璃子の彼氏

及川国臣（52） ……俳優

店員 A

学生 A

採用担当者 A

10 スーパー銭湯・リラックスルーム（夜）

スーパー銭湯のリラックスルームに、館内着を着て缶ビールを持った河合良太（27）が入って来る。リラックスルームにはリクライニングチェアが十数台あるが、ほとんどが埋まっている。

河合、空いているリクライニングチェアを見つけて座る。河合の隣のリクライニングチェアでは、松下真尋（27）が寝ている。

真尋のリクライニングチェアとの間には共用の台があつて、台の上には真尋が飲んでいる缶ビールが置いてある。河合、缶ビールを一口飲んで、台の上に、缶ビールを置く。

河合、あくびをしながらスマホを開く。画面には23時12分と表示されている。

河合、ビールを飲みながら携帯を見る。すると突然、

真尋「（飛び起きて）危ない！」

河合、いきなりの大声に驚き、真尋を見る。河合と真尋、目が合う。

真尋は、顔が赤い。

河合「（何かに気付いて）あ……」

真尋「（慌てて）ごめんなさい」

河合「いえ。大丈夫ですか？」

真尋、申し訳なさそうに河合に会釈をして、リクライニングチェアに座り直す。

河合、リクライニングチェアに座り直し、携帯を開いて、メールの履歴を調べらる。

真尋「ふう」

真尋、缶ビールを取ろうとして、誤って河合の缶ビールを倒してしまう。

真尋「あ、すいません！」

河合「うわ」

真尋「ほんとすいません。すぐ拭きます」

真尋、館内着のお腹のところで拭こう

として、

河合「(手を振って) いやいや、大丈夫です。

ティッシュ取ってきます」

河合、ティッシュを取りに行く。

真尋、申し訳ないという表情で河合の背中を見送る。

河合、ティッシュを持って戻って来る。

真尋、河合からティッシュを奪うように取って、

真尋「ありがとうございます。私がやります」

河合「あ、ありがとうございます」

真尋、こぼれたビールをティッシュで拭く。

真尋「ビールすみませんでした。あの、弁償します」

河合「いえいえ、大丈夫ですよ。ほとんど残ってなかったし」

真尋「いや、絶対弁償させてください」

河合「絶対……。わかりました。ありがとうございます。ございます。ビールをいただければ」

真尋「了解です！」

真尋、立ち上がるがふらついて、また
リクライニングチェアに座ってしまう。

河合「酔いすぎですよ。待っていてください」

河合、一人でビールを買いに行く。

真尋「ああ……」

真尋、ふらふらしながら、河合を追い
かける。

2〇同・自動販売機コーナー（夜）

河合、自動販売機で水を購入する。

真尋、河合に追いついて、

真尋「すみません。ビールでいいですか」

河合「（水を手渡して）どうぞ」

真尋「（驚いて）いやいや大丈夫です」

河合「まあ一旦飲みましょ」

真尋「（手を合わせて）すみません」

真尋、水を一気に飲む。

河合、笑って、

河合「めっちゃ飲むじゃないですか」

真尋「すみません……。思ったより酔ってたみたいで」

真尋、またごくごくと水を飲む。

河合、その様子を見てまた笑う。

河合「あの、もしかしてですけど……」

真尋「(被せて) あ……」

真尋、しまったという表情。

真尋の視線の先には、館内着を着た

佐々木璃子(27)と東海林章大(2

7)がいる。

真尋「もう来ちゃった」

河合「え」

真尋、申し訳なさそうに、

真尋「あの、お願いなんですけど、今からあ

の二人とご飯食べるので、一緒に来てほし

いです」

河合「(困惑して) はい？」

真尋「すみません。意味わかんないと思うん

ですけど、お願いします」

河合「お願いです……」

璃子と東海林が自動販売機の方に近づいてくる。

璃子、真尋に気が付いて、

璃子「え」

真尋「あ、璃子ちゃん？」

璃子「真尋ちゃん？やば久しぶり」

真尋「久しぶりー」

璃子「いつ以来だろ」

真尋「中学卒業して以来かな？」

璃子「じゃあ12年ぶりか。もう卒業してそ

んなに経つかー」

河合、真尋と璃子が話しているのを不

思議そうに見ている。

東海林、璃子に話しかけて、

東海林「友だち？」

璃子「うん。中学の同級生」

東海林「へー。すごい偶然」

璃子「ね。びっくりした」

東海林「え、ご飯一緒に行く？」

璃子「いいかも。(真尋に話しかけて)どう？」

真尋「えー。邪魔じゃなければ行こうかな」

璃子「じゃあ行こ」

璃子と東海林、レストランの方へ歩き出す。

河合、こっそりその場から離れようとする。

真尋、河合の様子を見て、

真尋「（小声で）こっちはです」

河合「（小声で）どうしてもですか？」

真尋「（無言でうなづく）」

真尋、河合を手招きしながら、璃子と東海林を小走りで追いかける。

河合、渋々、真尋に付いていく。

3 ○ 同・レストラン（夜）

レストランの中には客がまばらにいます。テレビが一台あって、バラエティ番組が流れている。

真尋・河合と璃子・東海林が向かい合う形で、四人席に座っている。

東海林、テーブルの上のメニューを取
って真尋に渡して、

東海林「先に選んでください」

真尋「ありがとうございます」

真尋と河合、メニューを見る。

璃子「カツカレー？」

東海林「よくご存じで」

璃子「ここでカツカレー以外食べてるとこ見
たことないもん」

東海林「じゃあ璃子はカレーうどんだ」

真尋「正解」

璃子と東海林、笑う。

真尋、焦ってページをめくって、

真尋「どうしようかな……」

河合「そうですね……」

璃子「ごめんね、全然ゆっくり選んでね」

東海林「気にしないでいいんで」

真尋「ありがとうございます……」

真尋と河合、何にするか悩んで、

真尋「……私もカレーうどんにします」

璃子「え、いいの？」

真尋「うん。カレーうどんで」

河合「どうしようかな……」

河合、メニューを行ったり来たりして、

河合「えーと、カツカレーにします」

璃子「え、二人とも気遣ってない？」

真尋「ううん。大丈夫」

河合「大丈夫です」

璃子「ならいいけど」

東海林「(手をあげて) すみません」

店員Aがテーブルに来る。

東海林「注文いいですか」

店員A「はい」

東海林「カツカレー二つと、カレーうどん二つ」

店員A「はい」

東海林「それと、飲み物が、ビールが……」

東海林、真尋、河合、璃子をちらりと見る。

璃子、手を挙げる。

それを見て、真尋と河合も手を挙げる。

東海林「……ビール四つでお願いします」

店員A「かしこまりました」

店員Aが、真尋、河合、璃子、東海林が手首に付けているロッカーキーのバンドのバーコードを読み取って、厨房へ向かう。

東海林、メニューをテーブルの端のメニュースタンドに立てる。

真尋「楽しみ」

河合「そうですね」

真尋と河合、そわそわして落ち着かない。

璃子「真尋ちゃんさ、すごい今さらなんだけ

ど、（河合を見て）彼氏さん？」

真尋「ううん、違うよ」

璃子「へえ。二人で銭湯に来るなんて、仲い

いんだね」

真尋「いや、さつき会った」

璃子「さつき！？どういうこと？」

真尋「リラックルームでたまたま隣の椅子
になって、で、今に至る」

璃子「え、勝手に付いてきたの？大丈夫な人？」

璃子、河合に対して警戒の表情をし、
背筋を伸ばす。

真尋「…：たぶん」

河合「いや、大丈夫な人ですよ。出会ったの
はさつきだけど、ご飯食べるから一緒に来
てって言われたんですよ。端折らないですよ」

真尋「そう。私がお願いしたの。だから大丈
夫な人、のはず」

河合「のはずって。確定してないんですか」

璃子「ならいいけど…：」

璃子、河合への警戒の表情を緩め、背
もたれに背中をつける。

真尋「(河合を見て)あの、すっごい今さらな
んですけど、お名前は…：？」

河合「ほんとに今さらですね。河合です」

真尋「河合さん。あの、真尋です」

河合「ああ真尋さん」

真尋「よろしくお願ひします」

河合「よろしくお願ひします」

真尋と河合、ペコリと会釈をする。

璃子「名前も知らなかったのか」

東海林「やばいね（笑）」

真尋、璃子に話しかけて、

真尋「（東海林を見て）えっと、彼氏さん？」

璃子「うん、一応彼氏」

東海林「一応ってなんだよ。めっちゃ彼氏だ

よ」

璃子「めっちゃ彼氏って何よ」

東海林「だって、付き合ってもう二年だよ」

璃子「誕生日忘れてたけど？」

東海林「それはごめんて」

璃子「だから一応彼氏に降格。めっちゃ彼氏

に昇格できるように励むように」

東海林「（敬礼して）がんばります！」

真尋と河合は苦笑いである。

璃子、真尋と河合の様子に気が付いて、

璃子「あ、ごめん」

真尋「ううん、全然」

璃子「というわけで、一応彼氏」

真尋「そうなのね。ちなみに、お名前は……？」

東海林「ああ、一番損な名字です」

真尋「一番損……？」

東海林「おれ、東海林（シヨウジ）です」

真尋「シヨウジ？」

東海林「トウカイリンって書いてシヨウジ。

東（ヒガシ）に海（ウミ）に林（ハヤシ）

ね。普通に読んだらトウカイリンで六文字

なのに、名字だとシヨウジで四文字になる

んだよ。漢字三文字なのは結構かっこいい

のに、読み方が短くなるの、損でしょ」

真尋「そ、そうかもしれません……」

河合「はあ……」

璃子「ごめんね。つまなくて。この人毎回

この話するんだけど、一回もウケたことな

いの」

河合、つまらなそうにしている。

一方で、真尋はうれしそうで、

真尋「ううん、全然。おもしろい彼氏さんじゃない！」

東海林「うわ、ありがとうねえ。璃子、いい友達を持ったな。一生大事にしろよ」

璃子、真尋に話しかけて、

璃子「あんま褒めないでね。すぐ調子乗るか
ら」

東海林「ほんとそう。調子乗るのだけが取り柄だから」

真尋「(うれしそうに) うける。おもしろ」

河合は、うれしそうにしている真尋を見て、不思議そうにしている。

すると、店員Aが食事を持ってくる。

店員A「お待たせしました。カツカレーのお客様」

河合と東海林、手を挙げる。

店員A、河合と東海林の前にカツカレーを置いて、真尋と璃子の前にカレーうどんを置く。

次いで、店員Aがテーブルの真ん中に

ビールを四つ、置く。

店員「ごゆっくりお過ごしください」

店員A、厨房の方へ帰って行く。

東海林、璃子にビールを渡して、

璃子「ありがと」

河合、それを見て慌ててビールを真尋に渡して、

真尋「すみません。ありがとうございます」

東海林と河合も自分の分のビールを取って、

東海林「それじゃあ、お疲れ様です」

璃子「お疲れ様」

真尋「お疲れ様です」

河合「お疲れ様です」

真尋、河合、璃子、東海林、乾杯してビールを飲む。

東海林「うま〜。沁みるわ」

璃子「うま〜い」

真尋「おいしいね」

河合「おいしいですね」

真尋、河合、璃子、東海林、それぞれ
食べて、

東海林「うんまい」

河合「カツカレーおいしいですね」

東海林「でしょ」

真尋「カレーうどんもおいしい」

真尋、河合、璃子、東海林、おいしそ
うに食べる。

璃子「そういえば、真尋ちゃん、今この辺に
住んでるの？」

真尋「うん。ここから2駅くらい」

璃子「そうなんだ。いつから東京？」

真尋「大学から。そのまま就職も東京でした」

璃子「へえ。全然知らなかった。あれ、高校
どこいったんだっけ？」

真尋「(ちよつと得意げに) 高校はね、一高」

璃子「ああ、そうだそうだ。頭良かったもん
ね」

東海林「一高ってすごいんだ？」

璃子「地元で一番賢い高校。私たちの時、い

ったの5人くらいだったよね？」

真尋「そうね。確か5人だったと思う」

東海林「へー。すごいね」

真尋「(まんざらでもなさそうに) いやいや、

そんなことないよ」

璃子「いやいや、頭良くないと入れない高校

だもん」

真尋「まあまあ。それなりに勉強はしてたかな」

東海林「へー。すごい」

河合「すごいですね」

真尋、ビールをグツと飲んで、

真尋「璃子ちゃんは高校どこなんだっけ？」

璃子「私はね、西高。全然勉強しなかったか

らねー」

真尋「えー、そうだっけ。でもすごいじゃん」

璃子「(困惑して) ま、まあ」

東海林、困惑する璃子を見て、

東海林「頭よくないもんね」

璃子「(東海林をどついて) うるさい」

真尋、ニヤニヤしながら、

真尋「そんなことないよ。いい高校じゃん」

璃子「あ、ありがとう」

河合、怪訝な表情で真尋を見る。

東海林「そういえば、」

真尋「(被せて) 大学はどこ行ったの？」

璃子「あー。大学。大学は行ってないんだよ

ね……」

真尋「えー、そうなんだ。なんかごめん」

真尋「ううん。大丈夫」

河合「真尋さん、あの、」

真尋「(被せて) 私は一応上智いったの」

気まずそうな璃子。

河合と東海林、目配せをして、話を変

えようとして、

東海林「あれ、河合さんは出身どこなの？」

河合「僕は千葉です。今は東京に住んでるけ

ど」

東海林「へえ。職場がこの辺とか？」

河合「職場はちょっと違うんですけど、今日

この辺りで飲んでて、銭湯があったので来てみたんです」

璃子「そうなんですね。仕事は何してるんですか？」

河合「メーカーで経理をしています」

東海林「うわ、めっちゃばい（笑）」

河合「よく言われます（笑）」

真尋「え、一緒だ。私もメーカーで働いてます」

河合「そ、そうなんですね」

真尋「お菓子メーカーで企画をしてて。たぶん皆さんも見たことあるお菓子だと思いますよ」

東海林「へえ。すごいね……」

真尋「他にも何個か内定もらったけど、やっぱり一番有名なところがいいじゃないですか」

東海林、店員Aを呼んで水を持ってきてもらう。

東海林、真尋に水を渡して、

東海林「飲んで」

真尋、水をごくごく飲んで、

真尋「ありがとうございます。酔ったみたい
です。すみません」

河合、璃子、東海林、真尋が落ち着い
て安堵する。

璃子、話題を変えて、

璃子「そういえば、井上さんって覚えてる？
バレエ部の」

真尋「ああ、いたかも。ショートカットの？」

璃子「そうそう！井上さん、声優になったら
しいよ。そこそこ売れてるんだって」

真尋「へー。全然知らなかった。でも、そう
だよね、そろそろ同級生に有名人が出てき
てもおかしくないよね」

璃子「だね」

東海林、そういえばと、

東海林「あれ、二人って、クラスも同じだっ
たの？」

璃子「二、三年が高橋の二組で一緒だった。
一年は違うよね？」

真尋「確か違ったと思う。私、吉岡のクラス
だったけど、璃子ちゃんはいなかったと思
うな」

璃子「そうそう！私、菊池のクラスだった！」

真尋「そうよね。菊池懐かしいな。伝説のね」

璃子「そうそう。伝説の菊池」

東海林「なに伝説って？」

璃子「私たちが二年の時に、パチンコで財布
盗んで捕まったの」

東海林「すご。そんなことあるんだ」

河合「それはすごいですね」

璃子「けど、やりそうではあったよね」

真尋「全然予想外ではなかった。捕まった時、
みんなあんまり驚いてなかったよね」

璃子「典型的な体育教師って感じでさ。とに
かく偉そうなの。めっちゃ嫌われてたもん
ね」

真尋「そう。一回学年集会になったよね」

璃子「あった！懐かしいく。全学年集まって
ね。校長が泣いたんだよね。『みんなに申し

訳ない』って。みんなドン引きでね」

真尋「中学生だったからね。おじさんが泣いてるのを見ると引いちゃうよね」

真尋と璃子、笑う。

真尋と璃子が笑っているのを見て、河

合と東海林は安堵の表情。

東海林「へー。そんなことが。ってか学年集会って懐かしいな」

河合「そうですね。久々に聞いたな」

璃子、ハツとして、

璃子「急に思い出したんだけど、真尋ちゃんあるとき見たって言ってなかったっけ？」

真尋「見た？」

璃子「ほら。夢」

真尋「ああ……。そうだったかも」

東海林「夢？」

璃子「そうそう。寝るときに見るあの夢。菊池が捕まる夢を見たんでしょ？」

璃子、東海林、河合の視線が真尋に向けられる。

真尋、嫌そうに、

真尋「……うん」

璃子「あ、ごめん。言わない方がよかった？」

真尋「いや、別に大丈夫……」

璃子「あれだよ、菊池がパトカーで連行されるところを見たんだよ」

真尋「（首を横に振って）ううん。正確に言う
と、校長が体育館で泣いてて、詳しくは分
からないんだけど、どうやら菊池がなんか
やらかしたらしい、っていう夢を見た」

璃子「そうだそう。それで、菊池がなんか
やらかすかもって真尋ちゃんが言ったんだ」

真尋「うん」

璃子「それで、ほんとに菊池がやらかしたか
ら、みんなびっくりしたんだよ。菊池が
捕まったことよりもびっくりしてたもんね」

東海林「何それ。予知夢みたいなこと？」

真尋「そう」

東海林「すご」

璃子「なんか他にも予知夢見たって言ってた

よね。あんまり覚えてないけど」

東海林「えー気になる」

真尋「……あーそうね。先生が着てくるジャージの色とか、体育でグラウンドを何周走るかとか、国語の授業で音読が名簿の最初から始まるか最後から始まるかとか……」

東海林「なにそれ。小さくない？（笑）」

璃子「もうちよつと大きい予知夢見たことないの？」

真尋「大きいのか……。就活のグループワークで司会をやって上手くいって、内定もらったこととか？でも内定辞退したからな……。別に大きいことではないかも」

河合、真尋の話聞いてハツとした表情をする。

璃子「それは真尋ちゃんの人生には大きくないね」

真尋「そうだよね」

璃子「みんな結構ひどいこと言ってなかった？予知夢の無駄遣いだとか、世界とか救

うとかしろよだとか」

真尋「そう。だから、最後の方は予知夢を見ても言わないようにしてた」

璃子「ああ、そうなんだ。予知夢見なくなっ
たと思ってた」

真尋「みんなには見なくなっただって言ってた
けどね。ほんとは見てたよ」

璃子「そうなのかー。なんかごめんね」

真尋「ううん。もう大丈夫」

東海林「最近も見たりするの？」

真尋「頻度は減ったけど、たまに見たりする
よ。(河合に目をやって) 今朝も見たし」

河合「(ハツとして) ああ！そういうことか！」

東海林「どうしたの？」

河合「このあと璃子さんとご飯食べるからっ
て言われたのに、真尋さんと璃子さん偶然
出会ったみたいな感じだから、なんか変だ
なと思ってたんですよね。そういうことか」

璃子「なるほど。それも予知夢だったのね」

真尋「うん。けど、信じてもらえないと思っ

「だから、言わなかった。ごめんなさい」

河合「いやいや、謝らないでください。たぶん、言われても信じてなかったと思うし」

東海林「けど、これもそんなに大きくないね」

璃子「たしかに」

東海林「他にはないの？」

真尋「ええとね……。さっき見たんだけど、

あの人、俳優の、名前が……」

真尋、考え込む。

ふと、テレビを指さして、

真尋「あ、あの人！」

テレビには、俳優の及川国臣（52）
が映っている。

璃子「及川国臣？」

真尋「そう。及川国臣がひっくり返ってる夢を見た」

璃子「（笑いながら）何それ。ドラマ？」

真尋「いや、ドラマじゃないんだよね。目の前でひっくり返ってた」

東海林「（笑いながら）やばいねその状況。役

者になるの？」

璃子「（笑いながら）いや、ならないでしょ」

真尋、苦笑いをする。

真尋「まあ、当たるか分からないからね」

璃子「そっか。夢が全部予知夢な訳ではないのか」

東海林「そりゃそうだよね。全部予知夢だったら大変だよ」

璃子「じゃあ及川国臣がひっくり返ってたら写真撮って送ってよ（笑）」

真尋「分かった」

河合「いや分からない方がいいよ。ひっくり返ってる人写真撮らない方がいいでしょ」

真尋「たしかに」

真尋、河合、璃子、東海林、笑う。

東海林、スマホを取り出して時間を確認して、

東海林「そろそろ行こうか」

璃子「そうだね。明日も早いし」

真尋「明日どこか行くの？」

璃子「ああ、仕事で大分に行くんだよね」

真尋「大変だね。土日休みじゃないんだ」

璃子「土日休みじゃないというか、決まった

休みがないというか。自分で会社やってて、

休もうと思えば休める感じ。忙しくて全然

休めてないけど」

真尋「……社長？」

璃子「一応社長だね。」

東海林「うちの社長が大分に見たい物件があるって言うからさ。朝から行くのよ」

河合「へえ。すごいですね」

真尋「(ショックを受けて)……」

璃子「大丈夫？」

真尋「なんか……。うん。ごめん。大丈夫」

璃子「じゃあ先行くね。またご飯行こう」

東海林「二人ともありがとう。じゃあね」

河合「(手を振って)ありがとうございました」

真尋「(手を振って)……」

璃子と東海林、真尋と河合に手を振り

ながらレストランを出て行く。

河合「璃子さんすごかったですね」

河合が真尋を見ると、真尋が涙を流している。

河合「（心配して）大丈夫ですか」

真尋「はい……。大丈夫……」

河合「全然大丈夫には見えないんだけど。水

飲んで落ち着いて」

河合、真尋に水を渡す。

真尋「ありがとうございます」

真尋、水を飲む。

真尋「ふう」

真尋、深く息を吐いて、

真尋「落ち着きました」

河合「ならよかったです」

真尋「なんか、よくわからなくなっただんです

よね」

河合「はい」

真尋「私中学がほんとに楽しくなくて。いい

思い出が一つもなくて」

河合「不安だったんでしょ」

真尋「え？」

河合「璃子さんに会うのが。だから僕を呼んだんじゃないですか？」

真尋「ああ、ばれてたんですね」

河合「璃子さんのこと苦手なんだろうなと思っ
てましたよ。どう見ても同じグループで
はなさそうだし。一軍と四軍というか」

真尋「誰が四軍ですか」

河合「ああ、すいません。失礼しました」

真尋「別にいいですよ。事実だし。ああいう
一軍が大っ嫌いで、でも勝てなくて、だか
ら勉強をがんばったんです」

河合「分かります。僕もそういうタイプでし
た」

真尋「一軍を見返したくて勉強して、いい大
学に入って、就活も大変だったけどがんば
って。そこそこのとこに就職して。それで
今日璃子ちゃんと会うことが分かって、チ
ヤンスだと思って。見返せるぞと思って」

河合「途中までは見返せてたんですけどね」

真尋「(うなずいて) 大学行ってなくて、彼氏
がつまんないところまではよかったんです
けど」

河合「めっちゃうれしそうでしたよね。東海
林さんが名字の話してたとき。あんなつま
らない話をあんなにうれしそうに聞いている
人、初めて見ましたよ」

真尋「あまりにもつまらなすぎて、さすがに
うれしかったですよ。この彼女にしてこ
の彼氏あり、って感じですよ」

真尋、笑う。

真尋「けど、そこからが……。予知夢の話に
なっ……」

河合「しんどそうでしたもんね。予知夢の話
の時」

真尋「結構言われてたんですよ。テストで
何出るか聞かれて、けど夢で見えないから
分からなくて、分からないと言ったら、役
立たずとか言われて。自分だったら予知夢
を有効活用できるのとか誰が役立たずに

持たせたんだとか」

河合「（うなずいて）……」

真尋「しかも社長になつてて」

河合「璃子さんすごかったですね」

真尋「なんか全部分からなくなっちゃって。

途中まで見返せてたのに、結局私より何倍

もすごくて、彼氏もいて、つまんない彼氏

だけど優しくって、私彼氏いなくて……」

河合「優しい人でしたね。つまんないけど」

真尋「水をたのんでくれるし、失礼なこと言

っても怒らない、つまんないこと以外はめ

っちゃいい人で。璃子ちゃんは璃子ちゃん

であの頃から変わってて、なんか優しいし

全然怒んないし。むしろ怒ってほしかった

のに。怒ってくれたら見返せ……いや見下

せたのに。あんなすごくていい人、見下せ

ないじゃないですか。私がめっちゃ性格悪

いだけ。ほんと惨め」

河合「（真剣に聴いていて）……」

真尋「予知夢もなんの役にも立ってないし、

璃子ちゃんの方がどう考えても私より人の役に立ってるし……。あーあ。これからどうしようかな。どう生きよう……」

真尋、うつむく。

河合「あの、たしかに璃子さんすごかったけど、真尋さんだって誰かの役に立っていると
思いますよ」

真尋「（愛想笑いで）ありがとうございます」

真尋、相変わらず落ち込んでいる。

河合「あの、僕のこと覚えてないですか？」

真尋「……え？」

真尋、顔を上げて河合を見る。

真尋「いや……。どこかでお会いしましたっけ……？」

河合「僕、真尋さんに助けってもらったことがあるんです」

河合、スマホを出してメールの画面を真尋に見せる。画面には『内定通知』と書かれている。

河合「この会社の選考受けましたよね？ グル

「ブワークありませんでしたか？」

真尋、何かを思い出してハッとする。

40（回想）貸会議室

都内の貸会議室。中には4人の採用担当者と、リクルートスーツを着た学生が20人いる。学生は、5人ずつのチームに分かれている。

そのうちの一つのチームに、松下真尋（21）と河合良太（21）がいる。

そのチームには、真尋と河合以外に学生Aと、その他二人の学生がいる。

河合は緊張の面持ちである。

採用担当者A「それでは始めてください」

学生A「どうしましょう。ひとまず役割を決めますか」

真尋「あの、私のグループワークで何が求められているか分かります。信じてもらえないかもしれないですけど。なので、私に司会をさせてほしいです。必ず全員合格さ

せるので」

河合「あの、なんで分かるんですか？」

真尋「それは……内緒です。では、河合さんはタイムキーパーをお願いします。書記は……」

50元のスーパー銭湯・レストラン（夜）

真尋「ああ、あの時の……」

河合「あの時はありがとうございました。僕、グループワークが苦手で、グループワーク落ち続けていたんです。けど、あの時は真尋さんのおかげでグループワーク通過して、内定もらって、今もそこで働いているんです。真尋さんは恩人なんです」

真尋「いえいえ、私はそんな。あ、さっき失礼なことを……」

河合「それは気にしないでください。実際有名じゃないし。けど、僕は真尋さんのおかげで入社できた会社でそこそこ幸せに働いているんです。だから、真尋さんの予知

夢は役に立ってるんです」

真尋「いやそれは……」

河合「いや、本人が役に立ったって言ってるんですよ。間違いなく役に立ってるでしょ」

真尋「河合さんの役には立てたのかもしれないけど……」

河合「けどなんですか。一人の人生を変えてるんですよ。それで十分でしょ。それに、たぶん気付いてないところで誰かを救ってますよ」

真尋「そうですかね……」

河合「そうですよ。そりゃ、世界は救ってないかもしれないけど。だいたいね、予知夢が見れるくらいで世界救わないとなんて、調子乗りすぎですよ。世界なんてね、ブルース・ウィルスに任せとけばいいんですよ」

真尋「ブルース・ウィルスってなんでしたっけ……？」

河合「アルマゲドン観てないんですか？」

真尋「観たことないです……」

河合「なんで観てないんですか！」

真尋「何で怒られてんだろ。なんかすみませ
ん……」

河合「とにかく、ちよつと予知夢見れるくら
いで、勝手に世界背負ってんじゃねえよつ
て言ってるんです。思い上がらないでくだ
さいよ。身近な人を一人でも救ってたら十
分でしょ」

真尋「(真剣に聴いている)……」

河合「(声が大きくなって)仕事だってね、社
長だから偉いとか会社員だから偉くないと
か、そんなのたないですよ。比べてどうする
んですか。見返すとか見下すとか、そんな
のやめましょうよ」

店員が真尋と河合を見ている。

河合、店員に気が付いて、すみません
と店員に会釈する。

河合「とにかく、自分のために生きましょ
う」

真尋「あの、なんでそんなに熱くなってるん

ですか」

河合「僕、ずっとあなたに感謝してて、いつかもう一度会うことができたなら、お礼を言おうと決めてたんです。で、ようやく会えたと思ったらなんかごちゃごちゃ言ってるから腹が立って……」

真尋「……ありがとうございます。私役に立ってたのか」

河合「そうですね。だからこれからは堂々としてくださいね」

真尋「(少し笑顔で)分かりました」

真尋と河合、水を飲む。

河合「いやー。しゃべり疲れましたね。そろそろ行きますか」

真尋「はい。そうしましょう」

真尋と河合、席を立って、レストランの出口に向かう。

と、出口付近のカウンター席に及川が座っている。

河合、及川を見つけて、

河合「え、あの人、及川国臣に似てませんか？」

真尋「……確かに似てる。っていうか、本人かも」

すると、及川が箸を床に落とす。

及川、箸を取ろうとして、バランスを崩しかけて、

河合「あぶない！」

河合、バランスを崩して椅子ごとひっくり返りかけた及川を間一髪支える。

及川「うお！助かったよ。ありがとう」

河合「いえいえ。それでは」

真尋と河合、レストランから出て、

河合「ね、役に立ったでしょ」

真尋、うなづく。

6 ○同・リラックスルーム（夜）

リラックスルームに戻ってきた真尋と

河合。

河合「疲れましたね。ちよつと休んで行きま
すか」

真尋「そうですね。あーあ、疲れた」

真尋と河合、元々座っていたチェアに座る。

真尋と河合、眠る。

×

×

×

河合、ハッと目を覚ます。

スマホを開く。

画面には3時24分と表示されている。

河合「寝てた……」

河合、隣を見る。

隣では、真尋が寝ている。

河合、真尋に話しかけて、

河合「真尋さん。寝てますよ」

真尋、目を覚まして、

真尋「ん……。寝てた……」

真尋、河合と目が合い、ハツとして照れながら、

真尋「あ、すいません。今何時ですか」

河合「3時24分です」

真尋「そんな時間か。結構寝ましたね」

河合、緊張しながら、

河合「あの、始発まで散歩しませんか」

真尋、笑顔で、

真尋「はい」

7〇歩道（早朝）

早朝の歩道。

太陽はまだ出ていなくて、あたりは真
っ暗だ。

真尋と河合が並んで歩いている。

河合「寒いし真っ暗ですね」

真尋「ほんとですね。さすが11月」

河合「ね」

会話が続き沈黙が流れる。

河合、思い切って、

河合「あの」

真尋「いいですよ」

河合「え？」

真尋「朝ごはん、食べて行きましょう。連絡

先も交換しましょう」

河合「なんで……」

真尋「さつき夢で見たので。あ、河合さんが
行こうとしてるカフェ、さつき調べたら臨
時休業でしたよ。あっちにいいカフェがあ
るので、行きましょ」

真尋、河合を先導する。

河合「ばれてたのか……恥ずかしいですね」

真尋「ふふふ」

真尋、河合を振り返って、ニコツと笑
って、

真尋「予知夢、役に立ちました」

(完)